



TITLE:

静脩 Vol. 31 No. 3 (1995.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 31 No. 3 (1995.1) [全文]. 静脩 1995, 31(3)

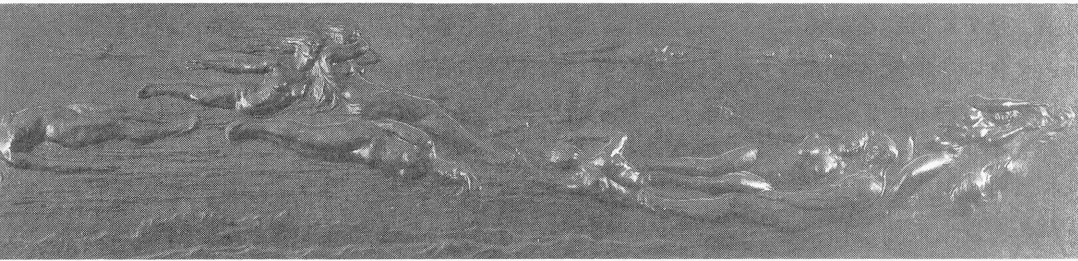
ISSUE DATE:

1995-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66015>

RIGHT:



静脩

1995年 1 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 31, No. 3

日本における科学の歴史資料保存

理学部教授 佐藤 文 隆

1. 自然科学と歴史

日本においては近代科学の歴史が浅いせい、これまでの、あまり自国の科学の歴史というものには関心がなかった。日本では、自然科学の話題といえは“最新の情報”にばかり目がいて、“過去”は絶えず消耗品のように屑かごに入っていくようなイメージが強く結びついている。それに対し文系の学問には「過去を振り返ってばかりいる」とか、「歴史の反復ばかりしている抹香臭い学問だ」とかいうイメージが結び付いている。そして理系の人間は過去を振り返ってばかりいる文系を“創造的でない”などといって、優越感を味わったりもするわけである。それが科学記事のマスコミでの報道の姿勢にも如実に出てくる。

「それは古い」というのは自然科学では軽蔑語であって、「古くからあるから重要」という視点はない。確かに物理学等の数理的に表現できて、実験で何回も再現できるような現象を扱っている分野では、知見は瞬く間に万人のものとなる。そしてその過程で、発見者の動機や意図におかまいなく学界の中で進歩・拡大していく。こうなると研究者にとっても過去にこだわりが生じないのは当然である。もちろん知識の累積の意味で過去に何が知られているかには関心はあるが、それは時の学界流に整理された「学術情報」であって背後の人間やその生きざまにまで関心が及ぶことは少ない。確かに「アインシュタイン学」という科学史の分野があると言われるほどスーパースターについてはそういうことはある。しかし、日本のスーパースターについてはまだ存在し

ない。また量的にみても科学研究が常人の職業になった現実に見合った歴史というものもない。

自然科学では歴史を省みないかのように云うと、自然科学には人名を冠した専門用語が多いではないか？という声が出るかも知れない。確かに、数学、物理学、化学などの用語にはそういうものが多いと思う。これは後に広範な分野で使われるようになった概念や現象には出来るだけ発見時の動機や位置付けが見えない中立的な意味しか発しない用語が歓迎されるのでそうなるのだと考えられる。仮に名前を冠されている人物がタイムワープででも現在にひょいと現れたら本人も理解できないようなことに自分の名が冠せられていることに驚くであろう。こういうわけで生の人物や歴史を尊重して名を冠しているわけでは必ずしもない。

2. 日本での科学のイメージ

日本では、自然科学はとかく“明るく、新鮮で、健康で、単刀直入で、清潔で、公明正大で、屈託がない”ものとして描かれる。それは大変褒め言葉のようであるが、それは同時に“潤いがなく、影がなく、平板的で、余韻がなく、底が浅く、単細胞である”というイメージと同居してるのであって、本当は尊敬もされていないのである。世の中全体が近代の単純な進歩観念に深刻な反省をしている昨今でもいまだに「ひたすら進歩する」「価値あるものは未来から」といううたい文句を唱え続けている。そんなのはいまや自然科学だけぐらいになっている。そして、この“明るく、屈託のない”自然科学に対して人々は無言のうちにもある種のうさん臭さを感じ

始めているのではないかと考える。

自然科学の社会的存在がかくも大きくなった現在、これは深刻な問題である。勿論、今でも単純な進歩を信じて疑わないという“うさん臭い”研究者の大群をどう考えるかという大きな問題もあるが、より重要なのは研究の実態と社会的なイメージの乖離を小さくする努力であると考ええる。自然科学の研究者といえども特殊な人間でないから大抵は人並な社会思潮のもとに生活しているし、研究の現場でも絶えず過去を振り返りながら前進しているのである。その意味では文系と理系でそれ程の違いはない思うのであるが、外から見た自然科学のイメージにはこういうものが多いし、研究者もあらためて「科学の性格」などを問われるとそういうステレオタイプの“明るく、屈託のない”科学のイメージを強調してしまうのである。

3. 科学のイメージに歴史で潤いを

科学のイメージの現実とのこの乖離を小さくするために有効な手段に特効薬があるわけではないが、なされるべき様々な方策の一つに、科学の歴史についての関心を高揚することがあると考える。社会一般でと研究者の間でと両方においてである。人間の創造的営みの一つとしての科学と、社会制度の一つとしての科学の両面における歴史がさまざまに語られることである。新参者の科学も他のもろもろの人間の営みと共存して社会の重層構造を構成しているさまを描くことである。

科学とて無傷でもなんでもないし、他の諸々の人間の営み、創造活動、と同様に血まみれの歴史を背負っている。ましてや知的な意味での影響でも、技術を通しての社会への影響でも、巨大なシステムと化した科学では隔離された楽園など存在しない。逃避はありえず、そういう実態をみすえつつ科学の営みは進んでいくことになるのである。社会的背景の中で翻弄されてきた科学の歴史に関心が高まることは社会一般が科学の実態を認識する上にも役立つことである。歴史への関心はこの“みすえる”上に重要な役割を果たすと考えるのである。

科学の営みを無限定的に賞賛してみたり、科学の様々な過ちに動転して全て放り出してしまうのも誤りであろう。社会も科学が300年前のニュートン時代と同じでないことを認識し、批評や注文も付ける対象として捉えるようになっていくだろうと思う。

4. 科学の歴史への招待

以上のような問題意識の基に、日本での科学の歴

史への関心を強める様々な活動が始められるべきであろうと考える。もちろん、歴史は一夜にしては作られない。歴史を語る資料が後世に残っていかなければならない。当面の資料保存はスーパースターであった科学者の身辺のものの保存から始まるのは自然なことであろう。

ここでは日本の物理学の歴史についてのこうした活動の一端を紹介したいと思う。このような紹介をする意図の一つはいわゆる文系の人達にも今後は日本の科学の歴史にも目を向けて専門的に研究する人が現れることを希望するからである。また、政治、経済、社会、文化、などの歴史一般の中に科学が無視できない位置を占めてくることになるからでもある。これまでの取り組みは殆んど周辺の科学者の中からのものであり、うまく歴史一般の中に融合されていないと感じている。

歴史には正史などはなく、時代時代の問題意識を反映しつつ事実をひもといていくのであろう。「正史」自体が一つの歴史と化していくのである。このような観点に立って、未来に歴史をひもとく資料を保存するという観点で作業を進めなければならない。ある時代の価値観であり取り捨選択すべきではない。しかし、現実には各時代で優勢であった動きが資料として系統的に後世に残されることになるのは避けられない。これはどの分野の歴史においてもそうであろうが、とりわけ制度化された現代の科学においては評価が各時点で比較的規格化されるため一層その傾向が強くなる。従って現在のところ各時代で大きな存在であった科学者の残されたものを歴史資料として保存・公開する作業が進行している。

5. 物理学関係の歴史資料保存の現状

一言で科学の歴史といっても次のような様々な内容を指す。

学説の発展、文化・思想、技術・産業、教育制度、人物史

これらすべてが関連しているのが現実であり、それこそが歴史の妙味なのであろうと思う。そういう意味ではあえて分類する必要もないのであるが、とかくこれまでの科学の歴史のイメージが「学説」と「人物」に限られて受けとられている節があるので敢えて広がりを書いておきたいのである。

ここで物理学関係の歴史資料の活動の現状の一端を紹介する。

(イ) 日本物理学会物理学史資料委員会

ここでは歴史資料の情報交換と資料蒐集を行なって

いる。例えば、現在資料をある程度整理して研究家の利用に供するを行なっているものとして次のようなところがある。

お茶の水女子大女性文化研究センター（お茶の水女子大学）

坂田記念史料室（名古屋大学理学部）

仁科会館（岡山県浅口郡里庄町）

仁科記念文庫（仁科記念財団）

二戸市歴史民俗史料館（岩手県二戸市）

日本物理学会

物性研究史料室（東京大学物性研究所）

湯川記念館史料室（京都大学基礎物理学研究所）

この外に展示室として

朝永記念室（筑波大学）

がある。

「お茶大」ではフランスでキューリー達（二代目）と共に研究した核実験家の湯浅年子の資料を収集している。「坂田」は湯川秀樹の後輩の素粒子理論家坂田昌一の資料収集を中心に、物性理論家であった有山兼孝のものも含まれる。「仁科会館」は昭和初期に理化学研究所で原子物理の日本への導入に中心的な役割を果たした仁科芳雄の生家に残されていた資料を公開している。「仁科文庫」は理化学研究所に残された仁科の資料を管理している。「二戸市」には二戸市出身で日本での地球物理を始めた田中館愛橘の14000点の資料を有している。「物理学会」には学会の資料と寄贈されたノート類がある。「物性」には物性理論家の小谷正雄の資料、ヒアリング・テープ、等を中心に物性研究の歴史資料を収集している。

（ロ）湯川記念館史料室

1979年に開設したこの史料室の活動については、既に「静脩」1990年3月に牧 二郎、河辺六男氏が書いたことがある。河辺氏の努力でその後も整理が進んでいる。

中間子論発見当時と阪大時代の論文下書き、計算用紙などが一まとめとなった風呂敷包の発見からこの史料室創設の話が起こったのであった。その後整理された資料には、研究面だけでなく、京大教授としての終戦時の大学行政、戦後の占領軍との対応などの資料が含まれており興味深い¹⁾。

（ハ）理研3号館仁科資料の内容一覧

旧理研3号館に仁科芳雄が亡くなった時に残され、その後捨てられずに残った資料を竹内 一氏を中心に整理した報告書が出されている。それによると資

料は次のようになっている²⁾。

分類	始番号	終番号
文献学習 1	1	68
文献学習 2	69	102
文献学習 3	103	149
相補性論文	150	165
Klein-Nishina 公式	166	218
教材	219	221
論文原稿・草稿	222	228
解説原稿・草稿	229	271
展示品	272	279
見学記その他	280	309
欧文書簡	310	509
事務的書簡など	510	568
和文書簡	569	1014
和文書簡ファイル中の案内などの非書簡	1015	1028

和文書簡には湯川、朝永の指導教官であった京大教授玉城嘉十郎が朝永振一郎の理研への就職の件で出した手紙なども含まれる。

（二）京都大学旧教養部所蔵実験機器

これは全国的にも貴重な京大が所蔵する歴史資料である。これについては整理にあたっている人達の文献を上げるにとどめる³⁾⁴⁾。現在も整理中であり、貴重な財産が多く、研究者や学生が目にする機会が作られることを希望する。

この資料の特徴は明治期の教育器具、実験器具、等であることである。自然科学の歴史資料としては文字資料だけでなくこうした器具の保存も大切であるということである。この点で現在を未来にどう残すかは実は全く新しい課題である。建物の改築・移転などの際に多くの実験研究者が悩みつつも過去の自作の機器も捨て去っている。

参考文献

- 1) 湯川記念館史料室発行
YHAL Resources Hideki Yukawa (I), (II), (III), (IV), (V)
- 2) 仁科記念文庫 「3号館仁科資料の内容一覧」
(1994年)
- 3) 永平孝雄、川合葉子、鉄尾実与資「明治19年以前の京都大学旧教養部旧蔵物理実験機器の分析」、科学史研究（岩波書店）、第3巻（1994年）129頁
- 4) 川合葉子「京都大学教養部図書館の明治期物理学関連図書に関する研究」（科研費報告書、1994年）

「空」から「雲」へ、「雲」から「空」へ

参考調査掛 都 築 澄 子

館報「静脩」の表紙題字面を飾っているのは、京都大学附属図書館一階の参考図書閲覧室西壁面に掲げられている石膏レリーフの写真です。附属図書館に通ったことのある人、図書館に勤める人達にとっては、このレリーフはなじみの深いものです。あるいは「静脩」表紙で、あるいは現在の図書館一階閲覧室で、ことによると、昭和58年に建て替えられる前の旧附属図書館正面玄関の上部に飾られていた頃から、この作品を目にしている方も多いでしょう。この間、永年にわたってこの作品は「雲」と呼ばれてきました。「静脩」誌上でも、Vol. 1 No. 1（あとがき）、Vol. 1 No. 2（『雲』 鯉坂二夫氏）、Vol. 12 No. 1（『斎藤素巖作の「雲」の管理について』）、Vol. 15 No. 2（『「雲」の作者—斎藤素巖という人—』 古原雅夫氏）、Vol. 25 No. 4（『「雲」（標題写真）を改版』）で、「雲」と題されているこの作品の記事をみつけることができます。問題のレリーフの下には『斎藤素巖作「雲」（大正13年）』という作品名プレートがつけられていたのです。

ところが、Vol. 25 No. 4 の記事では「雲」に注釈がついていて、はじめは「空」といわれていた、と記されています。また、昭和62年度の学部入学式で、西島安則総長は、『「空」と題された作品、何時の頃からか「雲」とも呼ばれています』と述べられています（「京大広報」330号（1987.4））。さらに、京都大学庶務部広報調査課が発行している「京都大学概要」の表紙を飾る写真でも、これと同じ作品が、『大学本館正面玄関を飾る「雲」（平成5年度版からは「空」） 斎藤素巖作』となっているのです。「雲」か「空」か、この作品のものと題は一体どちらであったのか、どのような経緯でこのように二通りの名前で呼ばれるようになったのか、確かめてみたくなりました。

先の「京大広報」にも記載されているのですが、「京都帝国大学新聞」の大正14年5月15日の記事に、この作品が京都大学に寄贈された時の事情が載っています。附属図書館所蔵の「京都帝国大学新聞」縮刷版によりますと、『新館入口を飾る二間餘の浮彫「空」 昨年の帝展で人気を集めた斎藤素巖氏の力作』とあります。斎藤素巖氏作の「空」は大正13年の帝展に出品されたもので、京都帝国大学が譲り受

けたのです。そして、大正11年から建て始められていた本部新館（現在の時計台）がこの年に竣工したので、その正面玄関車寄せの上部に、この石膏レリーフをもとに阿部整美氏がブロンズに鋳上げたものが掲げられたのです。この据付けの三日後の5月17日には、大学の創立を祝う行事が挙行され、摂政宮が来学されるので、それに間に合うようにと、牛車二台で運び込み大急ぎでとりつけられたようです。斎藤氏ご本人も大学に来られてこれを検分し、阿部氏の功績をはめたたえたと記事にもありますので、どうも「空」という題の正しさが、断然現実味を帯びてまいります。また、元の作品は石膏製でもあり壊れやすいので、別の場所にこれを保存したとあります。これが附属図書館であったのでしょうか。当時の図書館建物は、昭和23年にできあがった旧館よりもさらに前の代のものであって、明治32年より増改築を重ねてきたものが、大正14年7月の第三書庫の増築によって完成された頃にあたっています。さらに同記事によりますと、同じ作者の出世作「秋」も、建築学科講師の中牟田氏が斎藤氏の後輩である縁から乞い受けて、建築学教室に飾ってあったようです。

なお正確を期するためには、この前の年の帝展に出品された斎藤氏の作品が何と名づけられていたかを確かめないといけないでしょう。帝展出品作品のリストを、学術情報センターの図書目録システム（NACSIS-CAT）で「帝展」というキーワードで検索してみると、「文展・帝展・新文展・日展全出品目録：明治40年—昭和32年（日展史編纂委員会編1990）」があり、その所蔵館は東京芸術大学資料館であるとわかりました。東京芸術大学附属図書館に依頼を出して、斎藤素巖氏大正13年帝展出品作の作品名を調査していただきました。その回答は案の定、「空」でした。こうして、この作品の題は当初は「空」であったことが判明したのです。その結果、図書館所蔵の作品の下のプレートは『斎藤素巖作「空」（大正13年）』と変更することになり、本年（平成6年）9月より「雲」は「空」に変えられました。

斎藤氏の作品は、「空」から、雲か空かとさまよい、いま「空」へ戻ったのです。「雲」がいつ、いつから現れたのかは霧のかなたの出来事です。

報 告

平成6年度附属図書館展示会「吉田松陰とその同志」 および電子版展示会報告

附属図書館では、平成6年9月26日（月）から10月28日（金）まで、日曜・祝日を除く28日間にわたって、本館展示ホールにて平成6年度展示会を開催しました。今回は、本館の所蔵する維新特別資料文庫（「尊攘堂」資料）の中から、松陰を中心として彼に関連深い人物たちの遺墨を主に展示しました。折しも平安建都1200年にあたり、本学文学部博物館においても同文庫にテーマを得た企画展が行われ、それとの連携を図ること、また、電子図書館のデモンストレーションを兼ねた電子版展示会を試みるなど、新たな趣向が加わったこともあり、異例の長期開催となりました。

(1) 展示会は概ね好評で、合計1664人の入場者がありました。およそ半数が学外からの参観者であり、平日に比べると土曜日の方が4割程多く訪れていました。なお、期間についてはこのくらいでよいという意見が主流でした。開催情報の入手先として目立つのは、順に学内ポスター、看板、新聞などでしたが、もっと宣伝を、という声も数多くありました。

では、アンケートの結果を参考にして、観覧状況を具体的にみていきたいと思います。

注目を集めた展示物を順にいくつか挙げていきますと、「尊攘堂所蔵写真」「松陰画像」「鉄石書状」「松陰獄中書簡」「高杉七絶」「象山山水画」などとなります。やはり視覚に訴えるものが好まれるようです。テーマが比較的親しみやすいものであるためか、生の資料に触れ得た喜びや感動を素直に表現した感想が多く見受けられました。「書跡・書体から志士の人柄や性格までわかるようで感激した」「当時の世相・雰囲気伝わってくるようでよかった」といった感想からは、歴史の中に消えていった有名・無名の志士たちの奔走振りに思いを馳せたであろう様子がうかがえます。なかには、このような貴重な資料が所蔵されている事を初めて知ったという驚きを述べる方も少なくありませんでした。しかしながら、史・資料的価値を称揚する意見がある一方で、資料の取扱い（展示環境を含めて）の粗雑さを指摘する意見も見られました。

解説については、簡潔でわかりやすいと述べる方が比較的多いものの、対訳や書き下し文、活字にしたものなどを添えてほしかった、という要望の強さ

からは、展示資料をより深く味わいたいという熱心な姿勢を改めて知ることができました。

パネルや展示方法をもっと分かりやすく、という意見も少なくなく、人物や資料相互の関連を時代経過と結び付けるなどして、立体的かつグラフィカルに表現するような工夫も必要だったといえるでしょう。なお、今回は、従来の図録に代わってポストカードを作成しましたが、これについてはとても好評でした。

今後の展示会に望むテーマとしては、やはり幕末維新関係のものが人気を集め、次いで本館所蔵の特殊文庫について、そのほか美術関係や京都に関するものなどが要望されていました。

10月14日（金）には、人文科学研究所の佐々木克教授による講演「公武合体と尊皇攘夷運動」が本館AVホールで開かれ、一般市民ならびに教職員、学生で会場は満席となりました。

(2) 電子図書館システム（Ariadne）を利用した電子版展示会のデモでは、合計838名の入場者がありました。ここでは、展示会の内容（資料・人物解説、画像情報）を電子化して、電子図書館システムのメニューの一つとして提供すると共に、そのデモンストレーションを行いました。

電子図書館とは、デジタル化された公開可能な情報を、世界中のどこにあるかにかかわらず、オンラインで入手できるシステムです。

今回公開されたメニューは、「図書・論文検索」「世界の図書館」「催し物案内」「大学案内」などで、書誌情報ばかりでなく、画像情報や全文データにもアクセスできます。ハイパーテキスト化された展示会の内容も、画面上でリンクをたどって行く事によって、様々な順序で見えて行くことができます。

興味を引いた機能として、多面的な検索ができる点、翻訳・朗読・読書支援（メモ、付箋）などの機能とその統合性、ネットワーク性（世界の図書館）などが挙げられていました。また、画像データベースやハイビジョン映像の鮮明さも関心を集めていました。

全体として、電子図書館システムの有意義性、将来性に期待がかけられる一方で、データベース構築作業や、アクセス可能性、著作権問題など、実用化に向けての困難を指摘する意見もありました。

（雑誌・特殊資料掛）

「OPAC/TSS利用者アンケート」集計結果について

各研究室から接続して図書・雑誌の検索ができるシステム、OPAC/TSSは提供開始から4年を経過しました。この度、利用者の利用状況の把握と、検索環境の改善に役立てるため、8月10日発送で標記のアンケートを実施し、9月12日締切で179通の回答を得ました。以下、その結果の概要をご紹介します。

利用者の所属では、工学部が78名(46%)と半数近くを占め、次いで農学部18名(10%)、理学部16名(9%)、総合人間学部10名(6%)など規模の大きい学部が並びます。他方医薬系、および人文・社会系の各部局の接続は、学部等の人数と比較しても少ないことが確認されました。身分については、教官名での接続との回答が125名(70%)と圧倒的に多く、院生は31名(17%)と意外に少ないこともわかりました。

検索に使用する端末機種はNEC・PC-98シリーズと答えた人が107名と55%を占めますが、次いでSunなどのUNIXワークステーションでの接続が39名(20%)と、Macintoshの30名(15%)を上回っていることが注目されます。なお、最近の接続申請者はその大半が「ワークステーションからの接続」を希望しており、研究室の情報環境をうかがい知ることができます。

「検索結果に満足していますか」の問いについては、108名もの人が何らかの不満を表明しています。その理由や、要望として上げられている意見は以下のように大別されます。

- a. 接続・検索の難しさ
- b. 検索機能の充実
- c. ワークステーションからの接続で日本語入力ができない
- d. マニュアルの説明不足
- e. 遡及入力年代の進展によるデータの充実
- f. 学部生・学外を含む、OPACの一般開放

このうちa, bについては順次、システムの改良を行なっています。なお接続できなかった場合や、検索時のエラーなどのトラブルについては、本館システム管理掛で、個別に電子メールや電話で対応しています。一度つないで検索に失敗しても、諦めずにご一報ください。その他の疑問点についても、参考調査掛のカウンターでお受けしています。

c. について、「誘導型」検索においてはワークステーションでも日本語入力が可能となっております。

接続後の「サービスメニュー」から選択し、ぜひ一度お試しください。画面の指示に従って進行する、初めてでも容易に検索できるシステムになっています。

要望の多いd. に関しては、新しい利用マニュアル(第2版)がまもなく完成します。Internetからの接続方法や、従来の「コマンド型」検索方式に加えて、「誘導型」での検索方法についても紹介し、皆様の質問にお応えする内容とします。発行のお知らせは、附属図書館各カウンターで配布のニュースレター「LSN」等でいたしますので、希望者はご注目ください。

同様に要求の高いe. については、担当掛では入力作業を進めていますが、京大全体の冊数が膨大であるため、急速な進展は難しいものになっています。将来的には京大全体の図書館(室)の協力が必要となりますが、当面はカードとOPACの両方の検索をお願いすることになります。

f. のご希望については実施の方向で検討しています。具体的な方法については、別途お知らせいたします。

また、今回のアンケートでは、他の内外のデータベースについての利用状況、接続希望等についても同時に設問しましたが、31名の方が大型計算機センター提供のINSPECも併せてお使いであることがわかりました。また、他大学の大型計算機センター等への接続も行なっている方も多く、学術情報センターNACSIS-IRの各種ファイル(全国総合目録、SCI他)は46名が利用されています。また何らかの形でInternetを利用しているという方も33名ありました。全体として、ネットワークやデータベースへの関心の高さをうかがわせる結果といえます。皆様よりお寄せいただいた回答は、今後の図書館の情報提供活動にも反映させていきます。ご協力頂いた皆様に御礼申し上げます。

(追記)『平成6年度京都大学附属図書館利用者のためのNACSIS-IR講習会』開催のお知らせ

今回のアンケートでも希望の多かった上記講習会を、下記のように計画しています。

記

日時：平成7年3月17日(金)午前と午後の2回
開催(各2時間半)

会場：本館4階・地域共同利用室

定員：1回各10名 計20名
 受講申し込み・お問い合わせは：情報サービス
 課参考調査掛(2636)

(参考調査掛)

第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（西地区）に参加して

農学部学術情報掛 長 坂 みどり

平成6年10月10日から11日にかけて岡山大学で行われた「ネットワークと図書館情報」をメインテーマとしたシンポジウムに参加した。

情報環境が大きく変化し、ネットワークの発展やコンピュータ技術の革命的な進歩は、図書館に「情報源」へのアクセスの距離の壁を取り除き「バーチャル・ライブラリー（仮想図書館）」の実現を我々に実感させるに至り、図書館システムもワークステーションが汎用機に取って代わろうとしている。

このような状況の中にあって、各大学ともコンピュータ技術の進歩に伴うシステム管理要員の養成・育成に頭を悩ましている様子が事例報告や質問の中に現れていた。京都大学では、システム管理掛が専任で置かれ、かつ大型計算機センターとの人的連携が図られ、職員の層も比較的厚く、人材が確保しやすいが、多くの大学では、システム専任の職員を置ける大学は希である。その中で、高知大学附属図書館では、学術情報係が受入業務とシステム管理を併任しており、情報センターで3カ月間みっちり研修を受け、システム更新にあたったという話しは、今後の図書館と他機関の関わり方の一つの指針となると思う。図書館と大型計算機センター等が密接な連携を取り、情報サービスの発展・開発の方途を図ることが有効ではないか。

基調報告で図書館情報大学の永田治樹助教授が、「業務ベースからサービスベースへの志向」を提案された。ここで、大学図書館は、現状の認識と共にこれからの大学図書館のあり方をじっくり考えるべきではないかという訴えかけであった。情報環境の変化・発展を受けて大学図書館は、「どのような方向へ行くのか」、「どのようなサービスを利用者に提供していくのか」と言った新しい図書館サービスの開発に努力しなければならない。「情報源へのアクセスの保証」、「情報入手の可能性の増大」を図ること、また、図書館が単なる情報流通点ではなく、

データベースを作成し、情報の媒介者となること、さらに図書館資料と利用者をつなぐ司書機能（ナビゲーションやレファレンス）を果たすことなどいろいろな課題が述べられた。

これらの図書館サービスの高度化・必要性は、程度の差こそあれ、カウンターに立つ図書館員は、現実の利用者の要求の高まりとして日々身を持って感じていることだと思う。

ところで現在、利用者にとってはOPACや全国総合目録サービス（NACSIS-IR）により全国の大学図書館の目録検索が可能となり、ILLシステムにより必要な文献が迅速に入手できるようになったが、図書館側から言えば、自館所蔵の資料だけでなく全国の大学図書館所蔵の資料がサービス対象となり、自館の直接の利用者だけでなくネットワーク上の全国の大学所属の利用者をサービス対象に置かねばならなくなった。

しかし現実に京都大学では、部局においてはコンピュータ機器の不足によりOPAC用どころか業務用端末も不足している現状であり、目録入力しても利用者はその目録が機械検索できないといった矛盾が生じている。OPACの利用ができなければ、目録入力どころか遡及入力も現実味を帯びてこない。一方では情報環境の進歩への対応に苦慮し、一方では旧態依然とした状況に甘んじるといった二極化が生じている。

次期図書館システムの構築にあたっては、全学レベルの図書館サービスを全学レベルで考えるべきであろう。OPAC検索、学内LANによるCD-ROMの検索しかりである。ネットワーク時代といわれる現在、学外へのオープン化も学術情報センターとの関係で今後課題は残る。九州大学が次期システムへの取組でワーキンググループを作り、アンケート調査、システム報告書の作成等を行ったという報告は参考になろう。

現在京都大学では、京都大学附属図書館将来構想検討委員会が設置され、7つの部会で現状の分析と、将来構想の実現に向け検討がなされているが、部局を越えた図書館サービスのあり方を考える時期に来ている。これからの図書館のあり方やサービスの方向を考えるのも図書館員全員の課題である。図書館員の有り様によって、図書館利用者の可能性を狭めるということはあってはならないと自戒を込めて思う次第である。

図書館の動き

商議会の開催

平成6年度第2回の附属図書館商議会が、平成6年11月29日に開催されました。今年度の実行予算案、附属図書館長候補者選考の手続きについて、等が協議されました。

大学図書館職員講習会

平成6年11月7日から10日にかけて平成6年度大学図書館職員講習会（文部省主催）が本館を会場として開催されました。京都会場には、西日本の国公立大学等の中堅職員99名が参加しました。なお、翌週には（東地区）の講習会が東京大学で開かれております。

閲覧システムの更新予定

附属図書館の閲覧システム（総合人間学部も含む）は導入からすでに10年以上を経過し、老朽化してきたため、来年度からワークステーションによる新システムを導入する予定で準備を進めています。新しい閲覧システムは、部局図書室（館）での導入も可能なものとなっています。

目次

<巻頭記事>

日本における科学の歴史資料保存…………… 1

<その他の記事>

「空」から「雲」へ、「雲」から「空」へ…………… 4

<報告>

平成6年度附属図書館展示会「吉田松陰とその同志」、および電子版展示会報告…………… 5

「OPAC/TSS利用者アンケート」集計結果について…………… 6

第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（西

目録業務システム専門委員会の開催

平成6年11月30日に平成6年度第3回目の専門委員会が本館で開催されました。今回は、先に全国の国立大学を中心に実施した目録業務に関するアンケートの集計や分析を行うとともに、学術情報センターから目録担当者を招請し、目録業務をめぐる諸問題について協議しました。

ILL システム地域講習会の開催

平成6年12月5日から7日まで、学術情報センターとの共催でILL システム地域講習会が本館で開催されました。今回の講習会には他大学および京都大学から10名の参加者がありました。

電子図書館ワーキンググループの設置

平成6年秋に行われた電子図書館システム（Ariadne）の公開実験を踏まえ、本館所蔵資料のデータベース化の推進と、インターネットを利用した情報の収集・発信等を検討するため、館内にワーキンググループを設置しました。

地区）に参加して…………… 7

<図書館の動き>

商議会の開催…………… 8

大学図書館職員講習会…………… 8

ILL システム地域講習会…………… 8

閲覧システムの更新予定…………… 8

目録業務システム専門委員会の開催…………… 8

電子図書館ワーキンググループの設置…………… 8

後記

あけましておめでとうございます。昨年は天変地異が頻発し、騒々しい1年でしたが今年はどんな年になるのでしょうか。報告にもありますように、昨年の秋、附属図書館では電子図書館のデモを行いました。今年にはさらに腰を落ちつけて電子図書館システムの内容について改良を進める予定です。

さて、今年は亥年、猪突猛進のイメージがありますが、猪は意外と慎重で注意深い性格のようです。また、中国では亥は豚と混同されることもあるのですが、日本と比較した場合民俗学的にもしるい現象ではないでしょうか。

(M)

